床や談義

ルデヤ通信 第180号
2023. 3. 5

Date No.

「春を待つ"馬入自然楽校"を散策する」 岡井 勲

また馬入川堤の散歩の記事である。小学生の頃「馬入川」の名の由来を先生から教わった。源頼朝が新しく架けられた橋を渡るとき乗っていた馬が驚いて川に入ってしまった事から、「馬入川」と呼ばれるようになったそうである。江戸時代、東海道を上って行くとき、むさしの国の多摩川を過ぎてさがみの国に入り最初の大河が相模川である。「馬入の渡し」を舟で渡らねばならない。河口から3キロ上流にある。正面に富士山がそびえ、右側には大山、丹沢の山々、左側には箱根山が見える風光明美な景色は、多くの画家が描いている。広重、北斎も多く描いている。現在そこには「馬入の渡し跡」の石碑が建てられいて、広重の絵が大きくパネル化されている。旅人を乗せた二そうの平舟、岸には三本のタブの樹が描かれ、その向うに富士山の大パノラマが描れている。その裏面にも別の広重の絵と北斎の旅人等が描き込まれた浮世絵が説明と共に紹介されている。

その記念碑の西側には市の大きな体育館がある。川に面した東の堤の下は「湘南ベルマーレ」の広いサッカー練習場が二面もあり、その少し先に今日僕が書うとしている「馬入自然楽校」がある。「自然学校」ではなく「自然楽校」としてあるのがイイ思いつきである。何か建物があるのではなく、ただの自然の野原であり、榎や胡桃の樹が点在するだけである。川のすぐ近くまで散策の小道が羊腸のようにくねって続いている。ぼくは最近その道をよく歩くのである。少し以前、ススキと名残りの紅葉が美しかった頃、夕焼けせまる時刻にここを歩いた。川面を照らす夕陽とススキの白い穂波が実に美しかった。また陽が落ちた頃歩くと落葉して枝だけが黒く天に向って錯綜して伸びる榎や鬼胡桃の光景は、まるで映画「ロード・オブ・ザ・リング」の魔の森のように不気味であった。この鬼胡桃は上流から流れて来たものが大雨などで広がった水が運んで根付いたもので、この川岸に多く繁っている。夏になると緑色の実が鈴成りになる。秋になると自然に落ちて、その実の中の種が「くるみ」である。僕は初めそれが「くるみ」だと知らなかった。散歩中にある婦人が拾い集めているのを見て、尋ねると「くるみ」ですと言う。それで僕も拾い始めたくさん集めて来た。靴底で実を潰して、タネだけを拾って帰るのだが、それがひどい匂いがするのである。洗って乾して、今度はタネの中実(それがクルミ)を取り出すのが大変で、取り出しても実はほんの僅か、「骨折り損のくたびれ儲け」で止めてしまった。それでも散策は続けている。このクルミ同様、その場所を歩いていながら「自然楽校」について知らなかった。ごく最近それについての案内板やパネルを読んでその事業の発想と実践に驚き感心し、同感すること大である。それでこうして書く次第である。以前からそこを歩いていて、昔からそこに奇妙な背の高い風車がまわっているのに気付いてはいたが、ただの風景の飾りとしか意識がなかった。あらためて、それについての説明を読んでこの企画の全容が解った気がした。この風車はこの楽校のシンボルである。オーストラリア製で「イエロー・テイル」(Yellow Tail)と名付けられている。地下から水をくみ上げ、水路を通してつくられた「カエル池」「トンボ池」に流すのである。そこにはたくさんのカニ穴がある。オーストラリアではこの風車が砂漠地帯の人々の生活になくてはならないもので、とても丈夫でいままで故障したことがないそうで、いつまでも活躍してほしい」と記されてあった。この「水辺の楽校」は、浜口哲一氏の発想で2001年に生れた。平塚市、市民、国土交通省の協力で、以前は大部分が駐車場として、また不法投棄や不法耕作される場所になって自然破壊が進んでいた。そこを整備してトンボ池、カエル池などを作り、川には上流と下流にワンド(入江)がつくられ、水辺の自然環境を復元した。その所は、川の中洲の「ヤギ島」と上流ワンド、下流ワンド、そして岸辺地域の約100m四方から成っている。馬入河口から3キロの地点にあり、相模川源流の桂川からは106キロ下流にある。

この"フィールド・ミュージアム"(自然生態園)づくりは、大磯のアオバト研究家の田端裕氏も賛同し、山梨県の植原彰氏は

この取り組みは「織物の縦糸と横糸の関係のように自然が織りなす関係を明かにするものだ」と高く評価している。とも記されてあった。楽校の各部分が説明されている。「ヤギ島」…大きな中洲であり、以前はヤギが放牧されていたそうで、この名がついている。大潮の干潮時には陸続きになり歩いて渡れる。ただし潮がみちると、あっと言う間に川の中に没してしまう。6月には「ヤギ島探検ツアー」なるものが行われるそうである。「下流ワンド」…自然ウナギの保護や養殖のために石倉カゴが設置している。この入江には、ハゼやボラがいて、よく釣り人が来ているのを見かける。そして岸辺には、その中心に大きなエノキ（榎）が植っており、小高い「見晴しの丘」があり、「カマキリの小径」、鬼クルミの樹、カエル池、トンボ池がある。宮崎駿の「トトロ」にでて来る、巨大な楠の下の灌木の林の迷路のような、4メートルくらいの笹竹の「トトロの迷路」なるものもある。そこを出ると、「原っぱの一本道」には、オギ原とカヤネズミが広がって、湿地帯には主役のカニが活躍している。これらは「浜口哲一の自然観察路」と称されている。

「馬入水辺の生きもの」には、キクテハチョウ、黄色マダラ、ゴマダラチョウの幼虫、ウシガエル（僕らの子供時代は"食料ガエル"と言っていた）、白い大きなツメのハマガニ、赤いツメのアカテガニ、10センチくらい大きなオオセライソガニ、大カマキリ（手の平ほどもある）、テナガエビ、ウナギ、ツチイナゴ、カワセミ、カムリカイツブリなどの昆虫、魚、鳥がいる。これらの生きものが写真つきのパネルで紹介されている。こんな質問のパネルもあった。「君も自然探偵だ、ちがいがわかるかな？」としてあり、2種類のカラスの口ばしが描れていて、大きなカア、カアとすんだ声はハシブトガラス、ガアガアとにごった声はハシボソガラス。と書れている。　ぼくらが子供の頃は、以前この稿で触れたことがあったが、身の回りに小さな林や、原っぱ、池などが点在し、季節の変り目ごとに小動物やチョウ、トンボなどの昆虫、また小鳥など多種類の生きものを目にすることが出来た。夏のバッタやトンボ、水辺にはヤゴやお玉じゃくし、カエル、ザリガニ、雨の後の水たまりには、水すましやゲンゴロウなどを目にすることができた。今ではそれらの自然は、子供たちの身近から奪われてしまった。そこに気付いた浜口哲一氏は馬入川の岸辺にそれを再現させてくれたのである。「みんなの力でエコアップ」のパネルもあった。トンボが育つように、トンボ池、カエル池をつくった。また外来種のセイタカアワダチソウやシナダレスズメガヤなどの駆除も行い、呼びかけもしている。そう言われれば、馬入の岸辺には最近ススキの原が復えして来ているように感じた。僕が写真に撮ろうと魅せられた風景も紅葉とススキ原であった。これはやはり人為的な努力による復活がはかられていたのだと気付かされた。「子供たちを野に戻そう」という彼の呼びかけに大賛成である。彼は言う、馬入水辺の楽校は、自然遊びのフィールドです、ルールはほんの少しだけ、「自分の責任で遊ぶ」、ふれる、わくわくする、楽しい、調べる、これが彼とその仲間たちのスローガンである。もうひとつの彼の提言がある。"「トコロジスト」（その場所の専門家）になろう！"というすすめである。NHKの「ぶらタモリ」は見て楽しいのは、彼が行く先々で、「トコロジスト」が活躍するからだと僕は思っている。

浜口氏のことばをもう一つ引用しよう。「冬の生き物観察」…水辺の母なる木、エノキの下…冬枯れの原野には何もないように見えるけれど、多くの生きものが春の来るのを待っている。エノキの枝先や枯葉の下を見てみよう。エノキの実、ゴマダラチョウの幼虫、ナミテントウ虫、キリギリス、大カマキリのたまごが見つかる。「君も自然探検してみませんか。そして「トコロジスト」になってみませんか」この稿の読者のみさんも「馬入水辺の楽校」へ行ってみませんか。